

パラダイムの変換へ

= 技法と組織の近未来 =

創立以来20余年もの長い間、ボランティアとして日本スキー指導者協会（S I J）を維持してきた皆さんは、社会の指導者でもあります。かつては国際的にまた日本的に役員としてスキーの普及・発展に尽力されたベテランの指導者達です。「わび・さび」などの逃避の人生をとらず、大自然と限りなく共生しながら実動している真のホモ・ルーデンスです。

かのシラーは「人間は遊んでいるときに、真の人間である」と言っています。自分の好きなことをエンジョイし実動する姿を指向しています。現代の生活の利便性は動かない習慣環境を作りすぎ若者の無気力ぶりは目に余るものがあります。筋力を避けているようですが、リラックスなスキーは、落下運動で自律神経による筋力の働きだけの操作ですみます。あらゆる世代の健康志向やアメニティー指向、そして人間交流の場としてオープンウォーター水泳と共に楽しいスポーツとして誘う必要があります。

親睦団体としてのS I Jは中高年指導者には楽しい場ではあるが、若い指導者の入会が漸減しています。メリットが無いからとの声が年毎に多くなっているようです。

「昔はよかった」ではなく指導者のみならず、一般スキーヤーにもコミュニティーの面で快適な環境を創る必要に迫られています。

第12回インタースキー・セクステン大会で、私の持論である日本初のオリジナル「ウェアリアブル・スキーイング」^{注1}を発表して少なからぬ評価を受けましたが、この頃より能力スポーツからスキーヤーの健康志向、遊び指向へそして多種多様な指導法に世界の目が向けられてきました。

ハイテクノロジーではなく自然に戻ることに即ちあらゆる義務から解放され自発的に動く人生をエンジョイするのです。自然と共生し調和する為のシンプルな技法や遊びスポーツへの指向性を重要視することです。

さてシニアの指導員研修会に目を向けるとマニュアルによる故か壮年者までを対象にした技法とその指導法のみでの伝達により、この10年シニア層から不満の声が挙がっています。シニアでも、楽しくロングラン出来るテクニックは多様にあります。これら多種の技法を伝達指導する場が日本には無いようです。(財)全日本スキー連盟(S A J)の理解を得てS I J共催のシニア研修会を是非実

現させたきものです。ちなみに北海道スキー指導者連盟では(財)北海道スキー連盟の了解を得てシニア研修会を主催していると聞きます。

中高年スキーヤーを指導する上でもシニア指導者の老練なウェアリアブルな技法は必要と思われるます。

指導者が、スキーヤーに対する多くの課題のうち、S I Jがマスコミ等に認知される法人格がないことが挙げられます。スキーの楽しさを通じてのエコロジストとしての組織的な公的認知が必要だと思います。社会的認知と団体としての公益性を得て始めて一般の評価を受けることになるでしょう。

国家を越えた地球的良心に基づいて実動しているNGOや、また非営利貢献活動をするNPO^{注4}の重要性は世界性を持っています。

最近NPOは公的法人なので行政、企業、市民の三者が力と資金を出し合ってきています。また各政党でもNGOやNPO関係のミーティングを開催し、特にNPOを招いてシンポジウムを開いています。この中でNPOの寄付税制の改正も受け止めています。これはコミュニティーの活性化を担っているのはNPOであり、政治的分野でも社会的分野、またスポーツでも国がアプローチをしています。国が出来ないことを補填したり独自実動しているからです。

今やS I Jも親睦のみの団体でよいとのドグマ^{注3}は社会的に通用しなくなっています。我々のS I Jも親法人のS A Jの事業範囲外の一般スキーヤーに対する諸々の課題を補填するなど、コミュニティーを社会的にもつためにもNPOを立ち上げる時にきていると思う者です。



名誉会長 菅 秀文

注1 パラダイム=paradigm / 類型的枠組み

注2 ウェアリアブル=variable / 可变的(状況・状態に応じた)('86年日本スキー教程・教本全面改定の時運動操作の理念として謳った)

注3 ドグマ=dogma / 宗教の教義、独断

注4 NPO=Nonprofit Organization / 継続的、自発的に社会貢献活動を行う、営利を目的としない団体の総称

「NPO法人」という場合には、特定非営利活動促進法に基づき法人格が付与された特定非営利活動法人を指すと解されるが、単に「NPO」という場合、法人格の有無は関係ありません。